

寧古塔紀略満洲語の破裂音・破擦音の音質(2)

—音の対応における例外の検討—

吉池孝一

1. はじめに

現代の満洲語口語の破裂音と破擦音には、音質として、発音器官の緊張・閉鎖が強い強音(tense)と緊張・閉鎖が弱い弱音(lax)、声の有無、気音の有無が認められるけれども、吉池孝一(2021a)において、話し手と聞き手は、気音の有無によって音の区別をしており、発音器官の緊張・閉鎖の強弱や声の有無は、余剰であるとみて特段の不都合はないとした。

次いで、過去の満洲語の破裂音と破擦音の音質の検討をすることにした。過去の満洲語について、漢人や満洲人やモンゴル人が、満洲語とそれ以外の言語とを比較し、その音質について述べた記述があれば、直接的な資料となり得るが、寡聞にしてそのようなものがあることを知らない。そこで、次善の資料ではあるが、漢人が古満洲語口語を漢字で音写した資料によって、満洲語の破裂音と破擦音の音質を“推測する”ことにした。ここで扱う古満洲語口語は、『寧古塔紀略』(呉振臣著。1721年頃成書)に含まれる漢字で音写された満洲語である。吉池孝一(2021b)において、まず著者呉振臣の言語環境を検討し、書かれた資料の質をどのように考えるべきかについて述べた。次いで、漢字音写満洲語の語彙のうち、破裂音と破擦音を含むものを集め、それに対応する満洲語文語と現代満洲語口語二種(山本謙吾1969と清格爾泰1982)を並べて基礎資料とした。

その基礎資料によると、四種の資料(『寧古塔紀略』、満洲語文語、山本謙吾1969、清格爾泰1982)は、破裂音と破擦音において、下記アのように二項の対立の仕方が“ほぼ”一致する。しかし、下記イのように一致しないものも例外としてわずかながらある。

ア. 一致するもの

漢字で音写された満洲語をみると、漢字の無声有気音に、満洲語文語の t, k, c と現代満洲語口語の [t', k', q', tʂ'] が対応する。また、漢字の無声無気音に、満洲語文語の b, d, g, j と現代満洲語口語の [b, d, ɣ, ɟ, dʒ] が対応する。

漢字音写満洲語		満洲語文語	現代満洲語口語
無声有気音	⇔	t, k, c	t', k', q', tʂ'
無声無気音	⇔	b, d, g, j	b, d, ɣ, ɟ, dʒ

イ. 一致しないもの

一致しないものは八例ある。表1にあげる。この表の見方であるが、左右の資料において音の対立の仕方が同じ場合は等号=とし、異なる場合は不等号≠とする。なお、山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)にみえる無声摩擦音[f]を無声破裂音[p]に準じるものとし、有声

摩擦音 [ɸ] を有声破裂音 [b] ([b̥]) に準じるものとする。各資料に付したアンダーラインは互いに対応する音。() は当該漢字の音、「」は語義。? は対応が不確実であることを指す。「無し」は語が収録されていないもの。

『寧古塔紀略』		満洲語文語		山本謙吾(1969)		清格爾泰(1982)
① 喀(無声有気)不他米「射箭」	≠	gab <u>t</u> ambi	=	ga <u>f</u> təm	=	ca <u>b</u> tume
② 喀不(無声無気)他米「射箭」	=	gab <u>t</u> ambi	≠	ga <u>f</u> təm	≠	ca <u>b</u> tume
③ 温嗟(無声無気)蜜「賣」	≠	un <u>c</u> ambi	=	ʔu <u>ŋ</u> tʂam	=	u <u>ŋ</u> tʂa:me
④ 又 <u>不</u> (無声無気)哈「箸」	=	sa <u>b</u> ka	≠	sa <u>f</u> q	=	sa:p ^q xa
⑤ 甲 <u>工</u> (無声無気)「八」	≠	ja <u>k</u> ūn	=	dza <u>q</u> əŋ	=	dza ^q χūn
⑥ 法 <u>拖</u> (無声有気)「袋」	≠	fa <u>d</u> u	=	fa <u>d</u>		無し
⑦ 又而 <u>漢</u> (無声摩擦)「妻」 ^①	≠	sa <u>r</u> gan	=	sa <u>g</u> əŋ	=	sa <u>r</u> gən
⑧ 莽(-ŋ)式「歌舞」 ^②	?	ma <u>k</u> sin	=	ma <u>ɸ</u> ʃin ~ ma <u>q</u> ʃin	≠	ma <u>q</u> ʃim

表 1. 四種の資料で対応が異なる例

上記アの「一致するもの」によって、古満洲語口語の破裂音と摩擦音の音質を“推測する”ことが、今回の一連の議論の目的である。その議論は次回にすることにして、今回は次の二点を確認する。

一つは、満洲語文語のローマ字表記 t, c, k と b, d, j, g の音質を確認することである。漢字音写満洲語を、満洲語文語・山本謙吾(1969)・清格爾泰(1982)と対応させると、漢字音写満洲語は満洲語文語に比較的近いことがわかる。そこで、満洲語文語と現代満洲語口語二種(山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982)を比較し、満洲語文語のローマ字表記 t, c, k と b, d, j, g の音質を確認する。これは既に吉池孝一(2021b)で行なったが、第 2 節で再度確認する。

いま一つは、上記イの「一致しないもの」八例のなかに、一致しない理由を説明できるものが何例あり、説明できないものが何例あるかについて検討することである。音の対応における例外の検討であり、これは題目にあるように本稿の主な目的で、第 3 節以降において行なう。

2. 満洲語文語と現代満洲語口語二種(山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982)の対応

吉池孝一(2021b)で作った基礎資料の語彙によって、破裂音・摩擦音における、満洲語文

① 又而漢を含む語には、又而漢朱子(丫頭)や又而漢濟(女)もある。

② 『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語の中で、鼻音韻尾-ŋ が満洲語の音節末破裂音-k もしくは-g に対応しているように見えるのはこの一例のみであることから、莽の鼻音韻尾-ŋ と満洲語文語 k との対応は確実とは言い難い。このような判断から、吉池孝一(2021b)ではこの例を除いて資料の整理を行ったが、慎重さに欠ける処置であった。本稿では資料に加えることにする。

語と現代満洲語口語二種（山本謙吾 1969^③と清格爾泰 1982）の対応をみると次のようになる。

満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
t	t	t
c	tʂ	tʂ, tɕ(iの前)
k	k, q	k, q
b	b, f, v(母音間)	b, p, v(母音間)
d	d	d
j	dz, dʒ(非円唇の狭母音の前)	dz, dʒ(非円唇の狭母音の前)
g	g, ɣ ɣ と ʏ(母音間) ŋ(ŋの後)	g, ɣ ɣ と ʏ(母音間), ŋ(ŋの後)

ここに tɕ(iの前)や v(母音間)などがある。()の前の tɕ や vなどは、()内に記した条件による音声的な異音と理解することができる。それ以外は、ほぼ満洲語文語の t, c, k と b, d, j, g に、山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)の [t, tʂ, k, q] と [b, d, dz, g, ɣ] が対応する。山本謙吾(1969)の [p, t, tʂ, k, q] は強音であり、厳密には [p', t', tʂ', k', q' ~ p, t, tʂ, k, q] で、おもには無声有気音であるが条件によって無声無気音になるという^④。[b, d, dz, g, ɣ] は弱音であり、厳密には [b̥, d̥, d̥z, ɡ̊, ɕ̥ ~ b, d, dz, g, ɣ] で、おもには半有声の無気音であるが条件によって完全な有聲の無気音になるという^⑤。清格爾泰(1982)の [p, t, tʂ, k, q] は便宜的な表記で、厳密には無声有気音 [p', t', tʂ', k', q'] であるという。[b, d, dz, g, ɣ] も便宜的な表記で、厳密には半有声の無気音 [b̥, d̥, d̥z, ɡ̊, ɕ̥] であるという。これによると、満洲語文語と、現代満洲語口語二種（山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982）の音声の対応は、ほぼ次のようになる。

満洲語文語	現代満洲語口語二種（山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982）の厳密な表記
t	t'
c	tʂ'
k	k', q'

③ 山本謙吾(1969)中の、音韻の体系と構造の解説は、服部四郎・山本謙吾(1956)を掲載したものである。服部四郎・山本謙吾(1956)は、『服部四郎論文集3 アルタイ諸言語の研究 III』(1-55, 東京：三省堂, 1989年) 所載による。

④ [bait'] (仕事, 事柄, 事件) → [bait-aqw'] (大丈夫, 危険なし, 用なし) や [haqw'] (はだか) → [haqw-om] (はだかになる) のように、複合語として母音始まりの語が後続する場合、有気音の [t'] や [qw'] が無気音の [t] や [qw] となる。

⑤ [vadən] (ポケット) や [vadzəm] (終る) のように、有声音に挟まれた場合、完全な有声音の [d] となる。この例の場合の有声音は、母音であるが、m などの有聲の鼻子音でもよい。

b	ḅ
d	ḍ
j	ḍz
g	ḡ, ḡ

この満洲語文語と現代満洲語口語二種を、『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語に対応させると、前節第1節のアとイになる。次節以降においてイであげた例外八例を検討する。

3. 八つの例外の検討について

第1節の表1にあるように、互いに対応が異なる例は①②③④⑤⑥⑦⑧の八つである。この八例を、音の対応における例外として順次検討する。八つを大きく二つのグループに分け、まず②④⑧を検討し、次いで①③⑤⑥⑦を検討する。②④⑧は満洲語文語と現代満洲語口語が異なるものであり、①③⑤⑥⑦は漢字音写満洲語と他の三種（満洲語文語・山本謙吾1969・清格爾泰1982は互いに同じ）が異なるものである。

②④⑧を再度示すと次のようになる。現代満洲語口語二種のうち、清格爾泰(1982)はアクセントのある音節を「'」で示すので、それも加えて示すと次のようになる。

『寧古塔紀略』		満洲語文語		山本謙吾(1969)		清格爾泰(1982)
②喀不(無声無気)他米「射箭」	=	gaḅtambi	≠	gaftəm	≠	gaḅt'lume
④又不(無声無気)哈「箸」	=	saḅka	≠	safq	=	s'a:p'xa
⑧莽(-ᠮ)式「歌舞」	?	maksin	=	max̣f̣in~mag̣f̣in	≠	maḡs'lm

②における山本謙吾(1969)は無声摩擦音の f であり、『寧古塔紀略』・満洲語文語・清格爾泰(1982)と対応が異なる。④における山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)は無声音の f と p[p']であり、『寧古塔紀略』・満洲語文語と対応が異なる。この二例について、満洲語文語・山本謙吾(1969)・清格爾泰(1982)の音形をみると、無声破裂音の t ([t']) と q ([q']) と ʁ [q'x] の前で、問題としている音が無声音[f][p']となるように見える。もともと、清格爾泰(1982)では、無声破裂音の前において、②gaḅt'lume の b と④s'a:p'xa の p のように、問題としている音が有声音と無声音の二様の出かたをする。二様の出かたとアクセントの位置との関係の有無が気になるけれども、この二例に依るかぎり、アクセントの位置との相関はなさそうである。しかしながら、実例を多く集めて検討しなければ確かなことは言えない。

そこで、アクセントの位置を確認することができる清格爾泰(1982)の全資料によって検討したものを「表2. 満洲語文語と現代満洲語口語(清格爾泰1982)の対応」として提示し、それによって先ず②と④を検討し、次いで⑧を検討する。なお、清格爾泰(1982)中の語にはアクセントが付されないものも少なからずあるが誤記ではない。

4. 例外②④の検討

②と④を検討するにあたって参考になると考える資料を表 2 として次に提示する。これは、満洲語文語の b, d, g, (j) が^⑥、現代満洲語口語（清格爾泰 1982）においてどのような音として出現するかについてアイウエという音の条件によって区別して提示したものである。なお、実例には満洲語文語の j に対応するものはない。

ア. 満洲語文語の b, g に対応する現代満洲語口語（清格爾泰 1982）が、無声有気音（摩擦音を含む）の前で無声有気の破裂音もしくは摩擦音であるもの。

満洲語文語	現代満洲語口語（清格爾泰 1982）
abka	'a:b ^q xa~'a ^q xa(天) *無声の両唇摩擦音 Φ を p に準じるものとする。
egšemi	ukš'u:me(忙)
ugcambi	uktš'a:me(脱開, 擺脫)
ugsinsaca	ukš'un s'atšo(盔甲)
ugsilembi	ukš'ulume(穿甲)
fagcimi	fagtɕime~faktɕime(分離)
fegsimbi	fukš'ume(跑, 疾馳)
durgecemi	durukš'u:me(打顫, 顫抖)
tegsilembi	tukšul'ume(弄齊)
sabka	s'a:p ^q xa(筷)
sogtombi	sɔkt'ɔme(醉)
nagcu	na ^q xtšu(舅)
jugtembi	dzugt'ume~dzukt'ume(祀神)

イ. 満洲語文語の b, g に対応する現代満洲語口語（清格爾泰 1982）が、無声有気音（摩擦音を含む）の前で有声無気の破裂音もしくは摩擦音であるもの。

absi ningge	absʌn ⁿ iŋgu(怎麼个事)
agta morin	'actu mɔr'i(驢馬)
agtalambi	'actul ⁿ ume~'actɔl ⁿ ɔme(驢鬮)
ebci	'ubtšuw(肋骨)
ebišemi	ubš'ume(沐浴)
ogto	'ɔcto(藥)

^⑥ 清格爾泰(1982)は参考資料として満洲語文語も出す。その満洲語文語のローマ字表記は通常のものとは異なるところがあるので注意が必要である。どのように異なるかという点、メレンドルフ式ローマ字表記の音節末の t と k に相当する文字を、bidhe(書)、magsin(舞蹈)などのように、d と g で記す。これはモンゴル文字のローマ字表記の仕方の影響であろう。本稿では t と k として提示する。

ogson	oɣs'ɔn(脚步)
ogsombi	oɣs'ume(走, 邁步)
ogsimbi	oɣs'umbe(嘔吐)
bogson	bɔɣs'ɔn(門坎兒)
mogsolombi	mɔɣs'ul'ume(弄斷)
fagsi	fɑɣsʅ(匠人, 巧)
dabsun	dabs'un(鹽)
dabsulambi	dabsul'ume(腌)
debtelin	dubt'ule(本子, 冊)
dobton	dɔbt'ɔn~dɔvt'ɔn(書套)
togtombi	tɔgt'ɔme(定, 定准)
togšan deberen	tɔɣs'an duv'ul(牛犢)
sagsaha	sɑɣs'a:ʒɑ(喜鵲)
sebsehe	subs'uryu(螞蚱)
sebkembi	subk'ume(扑)
sugsaha	sugs'a:ʒɑ(大腿)
lagcambi	lɑgtɕime(斷)
jibca	dzibteia(皮襖)
cigten	tɕigt'un(杆子)
sibke	ɕibk'un(窓門)
šagšaha	ʃɑɣs'a:ʒɑ(腮)
šagšan	ʃɑɣs'ʅn(狡猾, 奸)
yagsimbi	jaɣs'ime(閉)
yagsikū	jaɣs'ʅxɔ(門門)
gabtambi	gabt'ume(射箭)
gabsihyan	gabsken(敏捷)
gogči	gɔgtɕe(犁轅)
hibcarambi	kivtʃarame(節省)
hugšukebi~hugšehebi	kugʃ'u:ʒo(腫張)
habšambi	xavʃ'ɔme(告)

ウ. 満洲語文語の d, b, g に対応する現代満洲語口語 (清格爾泰 1982) が、他の条件で無声有気の破裂音もしくは摩擦音であるもの。

adaki	aitʃk'e:~aituk'e:(鄰居)
adanggi	ait'ipɕe(幾時)
afabumbi	app'ume(交給)

ibedembi	ibt'ume (漸漸前進, 進)
fajuku sangga	fa:tʂ'uku saŋŋa~fas'aŋŋa (肛門)
foyodombi	fiat'ume (放屁)
obobumbi	app'ume (mbe) (使洗)
tasgambi	tasx'ame (干炒)
serguwešembi	surkuʂ'ume (乘涼)
sigse	ɕiskw (昨天)

エ. 満洲語文語の t, f, k に対応する現代満洲語口語 (清格爾泰 1982) が、有声無気の破裂音であるもの。

akjan	aɕdz'un (雷)
efujembi	ubdz'i:me (壞, 敗壞)
untehen	und'uyo (板子)
untu	'undo (堅的)
butūn	bud'un (罐)
maksin	maɕʂ'ʌm (舞蹈)
fekucembi	fiɔgtɕ'ime (跳躍)
tafambi	tab'ume (攀登)
tantambi	tand'ɣme (打, 責打)
tofohon	tɔb'x'ɔn (十五)
tofohoci	tɔb'x'ɔtɕi (第十五)
tokso	t'ɔɕsɔ~tɔ:ɕsɔ (村)
toksikū	tɔɕʂ'ɔ'xɔ (小錘子)
teifun mou	tuib'un mɔu (拐杖)
sikse yamji	ɕigɕien dze: (昨晚)
gefehe	gubkw (蝴蝶)
narhūn tuha	nærɣ'un dɔɕ'a: (小腸)
lifahan	lib'x'an (泥)
cifelembi	tɕibul'ume (吐(痰))
sifikū	ɕiɔbku (簪子, 發簪)
sijikiyan	ɕidzigien (袍子, 綿袍)
šešempe	ʂ'ɬba: (蜜蜂)
yafahan	ja:bk'un (徒步)
kesike	kw'ʂgu (猫)

表 2. 満洲語文語と現代満洲語口語 (清格爾泰 1982) の対応

満洲語文語の b, d, g, (j) が、清格爾泰(1982)において無声有気音であられるのは、アとウであり合計 23 例となる。そのうちアの 13 例が無声有気音（摩擦音を含む）の前であられ、ウの 10 例には有意な条件を見出すことができない。これによると、満洲語文語の b, d, g, (j) に相当する音が、現代満洲語口語において、無声有気音（摩擦音を含む）の前で無声有気の破裂音であられる“傾向がある”ことを認めてよい。

イには、満洲語文語の b, g に対応する現代満洲語口語が、無声有気音（摩擦音を含む）の前で、無声有気音ではなくその反対の、有声無気の破裂音もしくは摩擦音であるものを挙げた。問題はアとイという反対の現象が起こる条件を特定することができるか、それともできないかということである。上に挙げたアとイによる限り、アクセントの位置や口語的か文語的かという違いによる有意な差はないようであり、両者の違いが起こる条件を明示するのは困難である。

以上により、表 1 の②と④にみえる『寧古塔紀略』および満洲語文語と、現代満洲語口語二種との、破裂音における対応の違い、すなわち、②の山本謙吾(1969)は無声摩擦音の f であるが『寧古塔紀略』・満洲語文語・清格爾泰(1982)には有声もしくは半有声の破裂音 b が想定されるという対応の違い、および④の山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)は無声音の f と p([p'])であるが『寧古塔紀略』・満洲語文語には有声もしくは半有声の破裂音 b が想定されるという対応の違いは、『寧古塔紀略』および満洲語文語の d, b, g に相当する音が、現代満洲語口語において無声有気音（摩擦音を含む）の前で無声有気の破裂音であられる傾向があることによって説明することができそうである。

もっとも、エのように、満洲語文語の t, f, k に対応する現代満洲語口語が有声無気の破裂音となるもののうち、次に示すように、無声有気音（摩擦音を含む）の前で有声無気の破裂音である例も少なからずある。われわれは、満洲語文語の d, b, g が無声有気音（摩擦音を含む）の前で無声有気の破裂音であられる傾向とまったく反対の現象もあることを認めておかなければならない。

満洲語文語	清格爾泰(1982)
maksin	maɣʂʰɿm(舞蹈)
fekucembi	fiɔŋtɕʰime(跳躍)
tofohon	tɔbʰxʷɔn(十五)
tofohoci	tɔbʰxʷɔtɕi(第十五)
toksikū	tɔɣʂʰɔʷxɔ(小錘子)
sikse yamji	ɕiɣɕien dze:(昨晚)
gefehe	gubku(蝴蝶)
lifahan	liβʰxʷan(泥)
sifikū	ɕiɔbku(簪子, 發簪)
yafahan	ja:βkʰun(徒歩)

5. 例外⑧の検討

それでは表1の⑧はどうであろうか。

『寧古塔紀略』	滿洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
⑧莽(-᠒)式(歌舞)	? maksin	= maxʃɪn~maqʃɪn	≠ maɣʃɪm

莽に想定される鼻音韻尾-᠒ に、滿洲語文語の k、山本謙吾(1969)の x, q、清格爾泰(1982)の g が対応しているようにみえる。このような対応が、無理のないものかどうかという判定に際して、まず、漢字音写滿洲語中に使用された鼻音韻尾-᠒ を持つ漢字をすべて挙げ、それに滿洲語文語・山本謙吾(1969)・清格爾泰(1982)が、どのように対応するかをみる必要がある。次のようになる。

『寧古塔紀略』	滿洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
昂邦阿馬(大伯)	amba ama	ʔambu' (大きい), ʔam(父)	amba:(大), a:mΛ(父)
昂邦(大)	amba	ʔambu'	amba:
昂威赫(石名)	ayan wehe(光潤石子)	ayan 相当の語無し	ayan 相当の語無し
央(兩)	yan	jɛn	無し
拜央(富)	bayan	ba(j)in(金持)	baɣin~ba:jin
烏永(九)	uyun	ʔujɪn~ʔujɪn	ujɪn
⑧莽式(歌舞)	maksin	maxʃɪn~maqʃɪn	maɣʃɪm
蒙吾(銀)	menggun	mɛɣun~muɣun	muɣun
銘牙(千)	minggan	miɣan	miɣa:
封枯(手帕)	fungku	fɪŋkw	fɪŋko
倭我(六)	ninggun	ŋiɣun~ŋyɣun	niyɣun~ niyɣyɣun~niɣun
衣朗(三)	ilan	jiɫan	ilan
愛星(金)	aisin	ʔaɪʃɪn	aizɪn
花傷(紙)	hoošan	xɔʃɪn~xaɔʃan	xua:zΛn(zun)
甲工(八)	jakūn	dzaqɔn	dzaʔxɔn
鰲烘(土)	boihon	bɪoɣɔn~bɪoɣɔn	bɪoɣɔn
阿烘(兄)	ahūn	ʔaɣɔn du' (兄弟)	a:ɣan duu(朋友)

これによると、漢字音写滿洲語に使用された漢字の鼻音韻尾-᠒ に、他の三種の資料では、n, ng([ŋ]), m, ゼロ韻尾、および k, x, q, g が対応する。例数の多寡は n > ng([ŋ]) > m = ゼロ韻尾 > k, x, q, g の順である。鼻子音 n, ng([ŋ]), m が対応するのは想定通りである。ゼロ韻尾に対応するのは昂邦 amba の「邦」であり、昂邦阿馬(大伯)と昂邦(大)の二語ある。k, x, q, g に対応するのは、いま問題にしている莽式(歌舞)の一例のみである。一例のみであることから見

るならば、鼻音韻尾-ŋ を k, x, q, g の表記に利用するのは通常のありかたではないと言わざるを得ない。それでは、k, x, q, g に対応しているように見える「莽」という一例をどのように理解したらよいであろうか。

漢字音の鼻音韻尾-ŋ を、無声有気音の k, x, q([q'])に対応させることには無理があるので、表1では?を付したが、もしも当時の音が清格爾泰(1982)の ma_gʂ^hɮ_m のように g であったならば鼻音韻尾-ŋ を対応させることも不可能ではない。しかし、満洲語文語の k や山本謙吾(1969)の x, q([q'])を排除してまで、清格爾泰(1982)の g のような音を漢字音写満洲語の元となった寧古塔一帯の満洲語口語に想定する根拠を得ることができるか否か難しい問題である。g のような音であった根拠を鼻音韻尾-ŋ の使用に求めるならば循環の論法となってしまう。さらに、これは第4節で確認した音変化とも関りがある。満洲語文語の d, b, g は、現代満洲語口語において無声有気音(摩擦音を含む)の前で無声有気の破裂音として現れる傾向がある。このような傾向は過去と現在の満洲語口語にみられると想定してもそれほど無理はない。そこで清格爾泰(1982)の ma_gʂ^hɮ_m をみると、問題の g は、無声摩擦音に前接する。これは『寧古塔紀略』の古満洲語口語の当該部分が g のような有声音であったと想定することにとって不利である。他の根拠が欲しいところである。

⑧の k, x, q, g は音節末の子音であるから、『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語の中から音節末の破裂音と見なしてよいものをすべて挙げ、それを満洲語文語・山本謙吾(1969)・清格爾泰(1982)に対応させ、どのように漢字音写がなされているかを確認すると次のようになる。なお、問題となる音節末子音には下線を付す。

『寧古塔紀略』	満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
-b			
喀 <u>不</u> 他米(射箭)	ga <u>b</u> tambi【現在形】	ga <u>f</u> təm	ga <u>b</u> tume
又 <u>不</u> 哈(箸)	sa <u>b</u> ka	sa <u>f</u> q	s'a:p ^h xa
-k			
⑧ <u>莽</u> 式(歌舞)	ma <u>k</u> sin	ma <u>x</u> fɪn~ma <u>q</u> fɪn	ma <u>g</u> ʂ ^h ɮ _m
-t			
必 <u>帖</u> 黑呼辣米(讀書)	bi <u>t</u> he hūlambi	bi <u>t</u> xɜ'(本), xɔlam(読む)	bi <u>t</u> ku(書), xɔlambe(me)(讀)
必 <u>帖</u> 黑(書)	bi <u>t</u> he	bi <u>t</u> xɜ'	bi <u>t</u> ku

寧古塔周辺の北方漢語には、入声韻尾-p, -t, -k は無いはずであるから、音節末の-b, -t は、独立した一字(一音節)の頭音を利用して表記する以外に方法はない。-b, -t と同様に、-k も「克」などの一字の頭音で表記することは可能であり、そのようにした方が、表記法が統一され、『寧古塔紀略』の読者の理解は得やすいはずである。もしも⑧莽式(歌舞)の鼻音韻

尾-ŋ が、満洲語の k([kʰ])q([qʰ])もしくは g([gʰ])g([gʰ])を表記していたとするならば、『寧古塔紀略』の著者呉振臣は、あえて読者にとって理解が困難な表記法を用いたということになる。

以上によって考えるに、莽式 maksin の莽は、昂邦(大) amba の邦 ba と同様に、鼻音韻尾 -ŋ は利用せず、莽 ma と音写することを意図したのではなかろうか。そして、音節末の子音 k (満洲語文語の音形で示す) は「克」のような漢字で音写し、もとは莽克式のような漢字音写満洲語であった。そこから克が脱落した誤記ではないかと疑っている。

以上、表 1 で挙げた①～⑧の八つの例外のうち、②喀不他米(射箭)と④又不哈(箸)については、満洲語文語の b, g が、現代満洲語口語において無声有気音(摩擦音を含む)の前で無声有気の破裂音として現れるという傾向によって理解することができる。⑧式(歌舞)については確かなことは言えないが誤記の可能性を指摘した。残るは、①③⑤⑥⑦の五例である。

6. 例外五例について

表 1 から、①③⑤⑥⑦を再度挙げると次のとおり。

『寧古塔紀略』		満洲語文語		山本謙吾(1969)		清格爾泰(1982)
①喀(無声有気)不他米「射箭」	≠	gabambi	=	gaftəm	=	cabtume
③温嗟(無声無気)蜜「賣」	≠	uncambi	=	ʔuntʂam	=	untʂaːme
⑤甲工(無声無気)「八」	≠	jakūn	=	dzagən	=	dzɑ˩xun
⑥法拖(無声有気)「袋」	≠	fadu	=	fad		無し
⑦又而漢(無声摩擦)「妻」	≠	sargan	=	sagən	=	sargən

この五例は、『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語に使用された漢字音が、他の三種(満洲語文語・山本謙吾 1969・清格爾泰 1982 は同一)すべての満洲語音と対応が異なるものである。以下、順に検討する。

7. 例外①の検討

①喀不他米(射箭)の「喀」は、切韻系韻書によると溪母字であり、当時の北方の漢語音にあつては無声有気音の[kʰ]を想定してよい。それに対して、満洲語文語 g・山本謙吾(1969) g[gʰ]・清格爾泰(1982) g[gʰ]は有声もしくは半有声の無気音であるから合わない。なぜ合わないのか。まず溪母字の喀を使用した他の例をみると次のように二例ある。

『寧古塔紀略』	満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
洼喀(不是)	waka	vaqʰ	vaː˩xa
即喀(錢)	jiha	dʒiɣaː(おかね, 銅貨)	dziɣaː

※参考：『寧古塔紀略』濟哈(錢)、満洲語文語 jiha、山本謙吾(1969) dʒiɣaː(おかね, 銅貨)、清格爾泰(1982) dziɣaː

溪母は時代を遡ってもくだっても、ふつうには無声有気の破裂音であるから[kʰ]を想定し

てよく、洼喀(不是)における喀の用法は想定通りのものとなっている。それに対して、卽喀(錢)の「喀」は破裂音であり、満洲語文語の jiha の h は摩擦音であるから合わない。何故合わないのか、ということについては吉池孝一(2021b)で述べた^⑦。漢語の「錢」が付される jiha には、「銅錢」と「貨幣単位」という二種の意味がある。銅錢の jiha は濟哈で表記され、貨幣単位の jiha は卽喀で表記される。「喀」は洼喀のように、無声有気の破裂音として用いるのが通常の用法であったが、同音異義語を区別するため、『寧古塔紀略』の著者吳振臣は無声の摩擦音にも用いるという工夫をしたのであろう。いずれにしても喀は無声音に対して用いられる。

以上を要するに、喀は洼喀のように、無声有気の破裂音として用いるのが通常のありかたであり、①の gabtambi, gaftəm, gabtume ように満洲語の有声もしくは半有声の破裂音 g[ç] の表記には使用しないとするのが穏当なところである。そうであるならば、①のような音対応の例外について、手持ちの資料によるかぎり説明することは困難である。

8. 例外③の検討

③温嗟蜜(賣)の「嗟」は切韻系韻書によると精母字であり、当時の北方の漢語音にあつては無声無気音の [ts-] を想定してよい。それに対して、満洲語文語 c・山本謙吾(1969) tʂ[tʂʰ]・清格爾泰(1982) tʂ[tʂʰ] は、無声有気音であるから合わない。なぜ合わないのか。嗟を使用した例はこの一例のみであるから他の例を参考にはできない。この嗟について、竹越孝(1998)は「「嗟」(北京語の音価は[tɕie])は、実際には「差」音を意図し

^⑦ 「錢」と漢語で意味が付された満洲語は、『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語としては「濟哈」と「卽喀」の二種類ある。「濟哈」の「哈」は旧匣母字(有声摩擦音)であるが、当時の北方漢語音では無声摩擦音となっていたはずであるから満洲語文語の h と一致する。なお山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)において有声摩擦音の ɣ であることが気になるが、無声音の h[x] が母音に挟まれて有声音化したと理解することができる。他方の「卽喀」の「喀」は溪母字であるから、当時の北方漢語音では無声有気音の [kʰ-] であり満洲語文語の h とは合わない。満洲語文語と完全に一致する「濟哈」と、一致しない「卽喀」という二種の表記があることになる。一見、二種の表記は重複しているようであるが、そうではないということについては吉池孝一(2021b)の注④で述べた。再度繰り返すと次のとおりである。「胡增益(1994)の『新滿漢大詞典』は zhiha(=jiha)に、銅錢の計量単位である「文」の意味があることを挙げる。例文に、ilan(三) zhiha(文) saire(価値を持つ) zhiha(銅錢)「三文の価値を持つ銅錢」とあり、二種の zhiha(=jiha)を用いる。濟哈と卽喀はこの二種の jiha に相当するものであろう。『寧古塔紀略』をみると、濟哈は「金曰愛星，銀曰蒙吾，錢曰濟哈，水曰目克，…」というつながりで出てくる。金や銀とともにあるから、金や銀のように価値のある物すなわち銅錢(あるいは単に錢)を指す語と理解することができる。卽喀のほうは「買曰烏打蜜，賣曰温嗟蜜，兩曰央，錢曰卽喀。一曰曷術，二曰朱，三曰衣朗，…」というつながりで出てくる。売買に関する語および数字とともにあるから、錢を数える単位を指す語と理解することができる。おそらく吳氏は両者を同音異義語と認識して意図的に異なる音訳漢字を用いて音写し、漢語の「錢」にも貨幣と重量単位の二種の意味があるので、二種の音写に対して一種の錢という漢語を与えたため、重複のようにみえる語彙の提示となったのであろう。」。

ているという可能性も否定できない。」(11頁)とする。興味深い記述であるが詳細は述べないので論拠はわからないが、推察するに、次のようなことではなかろうか。

差は切韻系韻書によると初母字であるから無声有気音の[tʂʰ]あるいは[tʂ]を想定してよい。しかしながら『寧古塔紀略』は初母字の差を用いて満洲語文語の摩擦音 s を表記する。竹越孝(1998)は、このような初母字の用法を、現代満洲語口語の調査報告にある帯気性の強い[sʰ]と結び付ける。卓見である。これは、sの帯気性が強く[sʰ]のようであったため、それに無声有気音の差を対応させたと理解することができる。『寧古塔紀略』が、初母字(差や叉)を使用して帯気性の強い s[sʰ]を表記するとなると、同じ差を用いて満洲語文語の c を表記するわけにはいかない。そこで、初母字の差に口偏を付して、嗟と差と字面の上で区別して利用したということであろう。切韻系韻書の嗟は北京語で[teie]と発音するように精母字であるが『寧古塔紀略』の嗟とは異なるものと考えたほうがよい。『寧古塔紀略』の著者吳振臣の意図としては、初母字の差と同音の字として口偏を付して嗟として用いたと理解することができる。そうであるならば、③温嗟蜜(賣)と満洲語文語・山本謙吾(1969)・清格爾泰(1982)との不一致は説明が可能ということになる。

9. 例外⑤の検討

⑤甲工(八)の「工」は切韻系韻書によると見母字であり、当時の北方の漢語音にあつては無声無気音の[k-]を想定してよい。それに対して、満洲語文語 k・山本謙吾(1969) q[qʰ]・清格爾泰(1982) ʰx[qʰx]は無声有気音であるから合わない。なぜ合わないのか。工を使用した例はこの一例のみであるから他の例を参考にすることはできない。しかしながらこの工は、溪母字「空」([kʰ-])の誤写もしくは誤刻ではないかと私は疑っている。この語について、いわゆる三種女真語に「箭空」^⑧とある。実際に「空」を使用しているので「空」の誤写とすることも荒唐無稽な考えではないであろう。もっとも、『韃靼漂流記』(1644年、中国東北沿岸に漂着した日本人によるの満洲語の記録)において、満洲語の数字の八に「チャゴ」^⑨のように、日本語の濁音「ゴ」を当てているので、どこかの時点で無声有気音から有声音に変化した方言があつたと認めることができる。あるいは⑤甲工(八)の「工」も、そのような有声音を表記する意図の反映であるかもしれない。誤記か、それとも実際の音の反映か、そのいずれであるかについては、さらなる調査が必要である。

いずれにしても、このように理解してよいならば、⑤甲工(八)と満洲語文語・山本謙吾(1969)・清格爾泰(1982)との不一致は説明が可能ということになる。

10. 例外⑥の検討

⑥法拖(袋)の「拖」は切韻系韻書によると透母字であり、当時の北方の漢語音にあつては

⑧ 竹越孝(1998)は、『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語口語に、女真語乙、女真語丙、韃靼漂流記、愁州謫録を対応させた表2を掲載する。この表の記述を参照した。

⑨ 竹越孝(1998)の表2を参照。

無声有気音の[t']と想定してよい。それに対して、満洲語文語 d・山本謙吾(1969) d[d̥]は有声もしくは半有声の無気音であるから合わない。なぜ合わないのか。拖を使用した例はこの一例のみであるから他の例を参考にすることはできない。無声有気音の[t']を用いて、満洲語の有声もしくは半有声の無気音の d[d̥]を表記するという音対応の例外について、手持ちの資料によるかぎり、説明することは困難である。

11. 例外⑦の検討

⑦又而漢(妻)の「漢」は切韻系韻書によると曉母字であり、当時の北方の漢語音にあつては無声の摩擦音である軟口蓋音[x-]と想定してよい。それに対して、満洲語文語は sargan の g、山本謙吾(1969)は saɣən の ɣ、清格爾泰(1982)は saɣʌn の ɣ である。満洲語文語の g は有声もしくは半有声の無気音であることが想定され、山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)の ɣ は有声の摩擦音であるから、無声と有声という点で、漢字音写満洲語と他の三資料(満洲語文語・山本謙吾 1969・清格爾泰 1982)は合わない。なぜ合わないのか。漢を使用した例は三例あるが、又而漢濟(女)、又而漢(妻)、又而漢朱子(丫頭)の三例であり、すべて又而漢(妻)を含む語であるから、又而漢のみを考察の対象とすればよい。

満洲語文語 sargan の g は、山本謙吾(1969) saɣən の ɣ に、清格爾泰(1982) saɣʌn の ɣ に対応する。これによると、満洲語文語の g が、現代満洲語口語において、有声子音と母音、もしくは母音と母音に挟まれた場合、有声の摩擦音 ɣ として現れるように見える。そうであるならば、有声摩擦音 ɣ に、無声摩擦音の漢[x-]が対応しているとして検討することも可能となる。そこで、清格爾泰(1982)を資料として、そこに収められているすべての単語について、満洲語文語の g が、有声子音と母音、もしくは母音と母音に挟まれた場合に、どのような音として現れるかを調査した。

調査にあたって資料を次のように仕分けした。

まず大枠としてアイウに分けた。

ア. 有声摩擦音の ɣ, ɣ で現れるもの

イ. 有声破裂音で現れるもの

ウ. その他(文語 g が現代満洲語口語で k([k']) となるもの、および文語 g が現代満洲語口語でゼロとなるもの)

さらにその中を、問題の子音の音環境によって分けた。

①有声子音と母音の間

②母音と母音の間

③母音と有声子音の間

④母音の後(音節末子音として)

⑤母音と有声子音の間(音節末子音として)

さらにその中を、後続する母音の広いものから狭いものに分けて配置した。

以上によると次のようになる。

ア. 有声摩擦音の γ, ɣ で現れるもの

① 有声子音と母音の間

満洲語文語	清格爾泰(1982)	
後続母音 a		
ajirgan	adzirɣ'an(公馬)	
ilgambi	ilɣ'ame(区別, 辨別)	
urgan	ulɣ'a:n(套馬杆)	
burga	bulɣ'a:(柳条)	
burga	burg'a:(ɣa:)(柳)	
targambi	tarɣ'ame(戒之)	
turga	tulɣ'a:~tulɣ'a:(瘦(牲畜))	
sargan	sarɣ'an(妻)	【例⑦】
sargan jui	sa:ɣ'andze:(姑娘)	【例⑦に相当】
jilgan	dzilɣ'an(声)	
jurgan	dzulɣ'an~dzurɣ'an(賢良)	
gūldargan	gundarɣ'an(馬燕)	
後続母音 ɔ		
bolgo	bɔlɣ'on(干淨, 清潔)	
forgošombi	fɔlɣɔr'ɔme(轉, 調換)	
forgon	fɔrɣ'on~fɔrɣ'on(季)	
dorgon	dɔlɣ'on(糶子)	
後続母音 ʌ		
jasigan	dzeɣ'ʌn(信)	
後続母音 e		
elgiyen	uly'en(富裕)	
後続母音 u		
turgun	tury'un(原因)	
šurgembi	šury'ume(打寒戰)	
後続母音 u		
besergen	buzɣ'ɣ'un(床)	
temgetu	tumy'utu(記号, 証據)	
sirge	ɕ'irɣu(一絲)	
後続母音 i		
amargi	æmɣ'i:~æmɣ'i:(北)	
bargiyambi	barɣ'ime(収)	

fejergi	fedziy'i:(下)
fulgiyembi	fuly'ime(吹)
durgembi	dury'ime(震動)
tulergide	tuly'i:du(在外邊)
julergi	dzuly'i:(南, 南邊)
calgimbi	tɕialy'ime(水晃出)

②母音と母音の間

後続母音 a

aga	'a:ɣa(雨)
ibagan	iva:ɣ'an(妖精, 鬼怪)
dabagan	dai vɣɣ'an(山嶺)

後続母音 ɔ

dogo	d'ɔ:ɣɔ(瞎)
jugūn	dzɔ:ɣ'on(gun)(路)
cargi coro	tɕeyi: tʂɔ:rɔ(大後天)

後続母音 ʊ

agūra	a:ɣ'ʊr(武器)
-------	------------

後続母音 e

ajigan	aidziy'en(gien)(略小)
--------	---------------------

後続母音 u

tugi	tuiyɯ(雲)
------	----------

後続母音 i

eigen	wigien~wiyien(丈夫)
ergi	egi:~ey'i:(方面)
cargide	tɕeyi:du~tɕeyi:(那邊)

③母音と有声子音の間 (音節末子音となるもの)

mugdembī	muyd'lume(上昇)
----------	---------------

イ. 有声破裂音で現れるもの

①有声子音と母音の間

後続母音 ʌ

amgambi	amɣ'ʌme(睡)
---------	------------

後続母音 e

dambagu	dæ:mge~dæ:mjge(烟)
---------	-------------------

後続母音 u

urgun	urg'un(喜, 喜悅)
urgunjembi	urg'undz'uume(歡喜)

後続母音 u

ergen	urg'un(呼吸)
ergembi	urg'uume(休息, 安歇)
irgen	irg'un(民)
irgebumbi	irg'ub'uume(作詩, 咏詩)

後続母音 i

algin tuciha	æljg'in tɕytɕy'ɕa(出名了)
fulgiyan	fulgi'en(紅, 赤)
wargi	værg'i:(西)
ulgiyan	viŋgie(獵)
dergi	dergi:~ dirgi:(東)
dorgi	dɔlg'i:(内)
tobgiya	tɔmgi'en(膝蓋骨)
tolgin	tɔlgi'en(夢)
tulergi	tulg'i:(外面)
telgin	tulgi'en((褲)帶)
nergin de	nurg'indw(當時, 臨時)
lurgin	lurg'in(混濁)
yargian	jærgi'en(的確, 真的)

②母音と母音の間

後続母音 a

gargan	garɕ'an(枝, 河岔)
--------	----------------

後続母音 u

gurgu	g'u:rugo(獸)
-------	-------------

後続母音 u

gege	g'u:gu(姐姐)
------	------------

後続母音 i

sogi	s'o:giə(蔬菜)
hargi sogi	xar s'o:gie(芥菜)

④母音の後 (音節末子音として)

age	a:g(哥哥)
-----	---------

⑤母音と有声子音の間 (音節末子音として)

agdun	aɕd'un(結実)
-------	------------

agdulambi	agd'ulume (保証, 保獲)
ogdombi	ogd'ome (迎接)
ogdonombi	'ogdon'ame (去迎接)
magjan	magdz'un (矮)
sagda	s'a:gda (老人)
sugdun	sugd'un (氣, 空氣)
jagdan mou	dz'a:gdΛ mou (松樹)

ウ. その他 (文語 g → 口語 k , 文語 g → 口語ゼロ)

serguwešemi	surkuš'ume (乘涼)
jargima	dziarm'a (蠶繭)

満洲語文語の g が、清格爾泰(1982)において、有声摩擦音 ν, β で現れるか、それとも有声破裂音 g, g で現れるかについて、一定の傾向を見て取ることができる。有声子音と母音の間、もしくは母音と母音の間で、後続する母音が広めのばあい摩擦音として現れやすく、狭めのばあい破裂音として現れやすい。また、母音と有声子音の間にあつて音節末子音となるばあい、摩擦音ではなく破裂音として現れる (1 例だけ摩擦音となるものがある)。なお、摩擦音として現れるか破裂音として現れるかということとアクセントの位置は直接の関係は無いように見える。

問題の例外⑦の満洲語文語 sargan と清格爾泰(1982) sarβ'an(妻)をみると、問題の子音はもともと摩擦音化しやすい音の環境にある。すなわち、有声子音と母音の間であり、なおかつ後続する母音が広母音の a である。

以上に依って、満洲語文語 sargan の g に対応する『寧古塔紀略』の満洲語口語の子音は、清格爾泰(1982)の満洲語口語と同様に、当時すでに有声摩擦音の β であった、と想定するならば解決に近づくことができる。この有声摩擦音 β を、満洲語を第一言語とする話者が聞いたならば、音韻/g/の異音であるから、その摩擦音性に注意は向かないであろう。他方、漢語を第一言語とする『寧古塔紀略』の著者吳振臣は、満洲語の有声摩擦音 β を破裂音ではなく、摩擦音としての音声の特徴を聞き取った。有声摩擦音として聞き取ったか、あるいは無声摩擦音として聞き取ったか、については両方の可能性がある。前者の無声摩擦音として聞き取ったとする場合は、当時寧古塔一帯の漢語音には、すでに旧匣母に相当する有声摩擦音は無く、それは無声摩擦音に変化していたから、満洲語の有声摩擦音 β を、漢語の無声摩擦音 [x-] に“同化して”聞き取り、無声摩擦音の曉母字「漢」を当てたと想定することになる。

無声摩擦音 [x-] に“同化して聞き取った”と述べたがそうではなく、有声摩擦音として聞き取った可能性もある。吳振臣は吳方言の吳江方言にも通じていたはずであるから、満洲語音 β を有声の摩擦音 [h-] に近似した音として理解する素地はもっていた。 β と [x-] は声の有無の違いがあると承知しつつ、当時の北方の漢語音では、旧有声摩擦音は無声化しており有

声摩擦音は無かったので、無声摩擦音の[x-]をもって、満洲語口語の有声摩擦音 ɣ を表記するしかなかった。そこで無声摩擦音の曉母字「漢」を当てたと想定することになる。

いずれにしても、このように理解してよいならば、⑦又而漢(妻)と満洲語文語・山本謙吾(1969)・清格爾泰(1982)との不一致は説明が可能ということになる。

12. 結語

『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語と、満洲語文語および現代満洲語口語二種(山本謙吾1969と清格爾泰1982)とを対比させることによって、破裂音もしくは破擦音と見なすことができる音を、漢字音写満洲語の中に78見つけ出すことができた。その78のうち大半は、下記のように、漢字音の無声有気音に、満洲語文語の t, k, c と現代満洲語口語二種の [t', k', q', tʂ'] が対応し、漢字音の無声無気音に、満洲語文語の b, d, g, j と現代満洲語口語二種の [b, d, ɣ, ɟ, dʒ] が対応する。

漢字音写満洲語		満洲語文語	現代満洲語口語二種
無声有気音	⇔	t, k, c	t', k', q', tʂ'
無声無気音	⇔	b, d, g, j	b, d, ɣ, ɟ, dʒ

しかしながら、このようなきれいな対応をみせるものばかりではなく、下記のように、対応しないものが八つあった。本稿ではこの八例について、なぜ互いに一致しないのか、説明が可能であるか否かを検討した。

『寧古塔紀略』		満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
①喀(無声有気)不他米「射箭」	≠	gabambi	= gaftəm	= cabtume
②喀不(無声無気)他米「射箭」	=	gabambi	≠ gaftəm	≠ cabtume
③温嗟(無声無気)蜜「賣」	≠	uncambi	= ʔuntʂam	= untʂa:me
④又丕(無声無気)哈「箸」	=	sabka	≠ safq	= sa:p ^q xa
⑤甲工(無声無気)「八」	≠	jakūn	= dzaqən	= dza ^q xun
⑥法拖(無声有気)「袋」	≠	fadu	= faɟ	無し
⑦又而漢(無声摩擦)「妻」	≠	sargan	= saɣən	= sarɣan
⑧莽(-)式「歌舞」	?	maksin	= max ^ɣ in ~ maɣ ^ɣ in	≠ maɟʂ ^ɣ in

検討の結果、②③④⑤⑦⑧については不一致が起こる理由について、万全ではないものの、説明は可能であるとした。①⑥は、手持ちの資料によるかぎり、説明は困難であった。78例中の2例のみが説明が困難な例となった。そうすると、漢字音写満洲語と、満洲語文語・現代満洲語口語二種は、ほぼ一致するということになる。

異なる言語の音特徴を、互に対応させて対音対訳資料を作る場合、一致する傾向を示しつつも、対応はある程度乱れるのがふつうである。しかるに、『寧古塔紀略』において、漢人である呉振臣が、漢語が持つ音の対立を利用して、満洲語の音の対立を表記したわけであ

るが、その音の対応はきれいな一致を示し、ほぼ例外がない。すなわち、漢字音の無声有気音に蒙古文語 *t, k, c* と現代満洲語口語 [t', k', q', tʂ'] が対応し、漢字音の無声無気音に満洲語文語 *b, d, g, j* と現代満洲語口語 [b, d, ɣ, ɟ] が対応する。

今回はこのようなきれいな対応を示すことの意味について検討する。

参考文献（発行年順）

- 服部四郎・山本謙吾(1956)「満洲語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30：1-29。『服部四郎論文集 3 アルタイ諸言語の研究Ⅲ』（1-55，東京：三省堂，1989年）所載による。
- 山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 清格爾泰(1982)「満語口語語音」『内蒙古大学学报（哲学社会科学版）』。(1998)『清格爾泰民族研究文集』232-355，北京：民族出版社。
- 胡增益 主編(1994)『新満漢大詞典』烏魯木齊：新疆人民出版社。
- 竹越孝(1998)「『寧古塔紀略』に見られる漢字音写満洲語語彙」『鹿大史学』45、1-19頁。
- 津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20講』東京：大学書林。
- 姜維公、劉立強(2014)『東北辺疆卷 八 柳辺紀略 龍沙紀略 寧古塔紀略』中国辺疆研究文庫 哈爾濱：黒龍江教育出版社。
- 吉池孝一・中村雅之・長田礼子(2020)『女真語と女真文字』付碑文拓本 10種画像(JPEG)、愛知：古代文字資料館。
- 吉池孝一(2021a)「現代満洲語口語の破裂音と破擦音の音質について」『KOTONOHA』第 228号 (2021年11月)、20-31頁。
- 吉池孝一(2021b)「寧古塔紀略満洲語の破裂音・破擦音の音質(1)—資料の整理—」『KOTONOHA』第 229号 (2021年12月)、22-33頁。